

特集

学部教育の改革

シラバス

広報委員会

▼その一▲

はじめに

前号の「学長インタビュー」で学長自ら語っているように、本学は、統合移転が完了した今年度から、全学を挙げて教育の改革に取り組んでいく。多少陳腐な言い回しをすれば、ハードづくりがようやく完成し、それをベースにソフトを手当する時期が到来した、ということになるだろう。言うまでもなく、教育は研究と並ぶ大学の支柱である。この改革なしに大学改革はありえない。

新年度『フォーラム』はこうした状況をにらんで、一号と二号の特集を、ともに「学部教育」におくことにした。その第一弾として今回は「シラバス」を取り上げた。
全学部がシラバスを備えることに

なったが、その評価はまだ定まっていない。これを占いながら、改善点があればそれをも探っておきたい。シラバスという観点から、学部教育の見直しの具体的材料を得ることができないか、それが広報委員会の狙いである。

シラバスとは何か

「シラバス」という用語はいまではすっかり市民権を得たようだが、以前から使われていたわけではない。それが本学でもチラホラ聞かれるようになってから、どれくらいになるのだろう。学内には、シラバスなんて「知らばす」とばかり、言葉そのものを知らない学生も、少数だが存在する。そもそもシラバスとは何だろう。

言葉の響きほどに難しいものではない。「シラバス」は“syllabus”のこと。手近な辞典には、“a concise statement

or table of the headings of a course”などと書かれている。意味の上から言えば、授業の内容細目と変わらない。

では、なぜ「シラバス」などとジャーン染みた英単語が使用されるのか。これには多少特別な事情が絡んでいるように思われる。この言葉が、本学のみならず、いま日本の多くの大学で、いわば流行になっているのはそのためである。

大学設置基準の大綱化を促した大学審議会の報告書に、「大学自己点検・評価項目例」という文章が併記されているのをご存じの方は多いだろう。その項目の一つに、「教育指導のあり方」として「各授業科目ごとの授業計画（シラバス）の作成状況」という箇所がある。これがすべての理由ではないにしても、シラバスという言葉が諸大学の中に浸透しはじめた一つのきっかけになっていることはまちがいない。本学

の場合も例外ではない。シラバスの作成と自己点検・評価作業とは、切っても切れない関係にある。

自己点検・評価委員会による『広島大学白書2—新しい大学像をめざして—』がそれを指摘している。第二章「学部の教育活動」では、シラバスは、「カリキュラムの全学開放」や「学部間協力」といった、いわゆる学部教育改革の議論のなかに位置づけられている。シラバスと従来の授業概要との大きな違いは、この点にある。

つまり、シラバスと授業概要との差異は、単に言葉の差異であるにとどまらず、その背景にある教育理念の差異を表現するものだと言つてよい。

広大シラバス一覽

本学のシラバスはどのようなになっているのか。以下、各学部が保有するシラバスを挙げてみよう。



| 学部名 | タイトル | 総ページ数 |
|----------|--|---------|
| 総合科学部 | 総合科学部開設授業科目講義概要(シラバス) 講義概要(平成五年度以前入学学生適用) | 116 383 |
| 文学部 | 授業計画書(シラバス) | 177 |
| 教育学部 | シラバス—授業の内容とその計画— 授業科目要覧 | 623 |
| 学校教育学部 | 授業科目要覧 | 605 |
| 法学部・経済学部 | 講義概要(履修の手引き) | 210 |
| 理学部 | 履修の手引き平成五・六・七年度入学生用 | 285 |
| 医学部 | 授業日程 臨床マニユアル | 143 |
| 医学部 | 総合薬学科 保健学科 | 62 |
| 医学部 | 授業科目概要 | 59 |
| 工学部 | シラバス(Syllabus、授業計画) | 143 |
| 工学部 | 講義要目 | 471 |
| 生物生産学部 | 授業計画書 | 169 |

(注)大学院のなかにもシラバスを作成しているところがあるが(例えば、教育学研究科)、今回は省いている。

この一覧を眺めるだけでも、シラバスに関して各学部の足並みがそろっていないことが理解されよう。タイトルすら各学部の自主性にゆだねられており(つまりマチマチであり)、シラバスという言葉さえ統一的に使用されていないわけではない。従来から用いられている表現を踏襲している学部もある。シラバスを知らない学生がいても、実は不思議ではないのである。

内容についても、共通する項目は多いが、重ならないものも少なくない。昨年度、自己点検・評価委員会が実施したアンケートによれば、「授業の概要」や「教科書・参考文献」などは等しく掲載されているが、「成績評価の方法・基準」を載せていないシラバスもある(これについては、「広島大学白書2」48ページの表II-3を参照してほしい)。分量にも格差がある。特に教育関係の学部のページ数が多い。開講された授業数が多ければ、当然分量は増えることになるだろうが、それだけに理由を求めることはできそうもない(例えば、開講されていない授業が掲載されているケースもある)。後に見る学生へのアンケートでは、「持ち運びできるよう、コンパクトにしてほしい」という要望が格段に多かった。

統一されているのはサイズだけかもしれない。右に示したすべてのシラバスがA4判で作られていた。公文書が、国際規格にあわせてA判になったのは一昨年

度からだが(「フォーラム」がA4判になったものとき)、シラバス作成に際して、各学部がこれを配慮したのかもしれない。だが、「コンパクトなシラバス」を熱望する学生は、B5判のシラバスを求めていた。

シラバスをすでにデータベース化している学部があることも、指摘しておく必要があるだろう。理学部は、平成六年度の「高度化推進特別経費」(そのなかの大学改革推進費)によって、シラバスを電子化し、現在HINETにのせている(その具体的な内容は、本号に寄稿していただいた松浦博厚・宮村修「理学部教育支援情報システムの運用開始」を参照のこと)。これを使って、学生や教官は、各教室の端末や生ロビー付近に設置された四台の端末で自由にデータを引き出すことができる。筆者も試みに、研究室や家からアクセスしてみたが、改善の余地は残っているとしても、なかなかの使い勝手であった(URLが上述の文章に書かれているので、一度覗いてみることをおすすめしたい)。

シラバス・アンケート

さて、本学の教官や学生は、シラバスをどう見ているのだろうか。それぞれの評価を知るために、各学部の教務関係教官と学生に簡単なアンケートを実施した。

まず、教官のアンケートから見てゆきたい。質問項目は次のとおり。

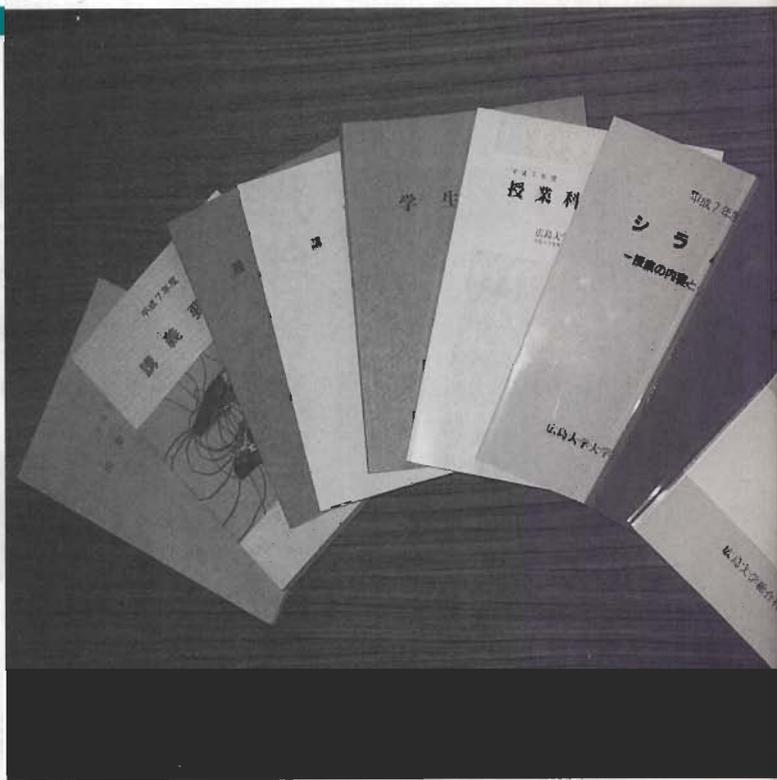
- 一、シラバスを導入していますか
- 二、シラバスを導入する以前はどのようにして説明をしていましたか?
- 三、シラバスを導入した年度は?
- 四、シラバスを導入した経過・理由は?
- 五、シラバスを導入した成果は?
- 六、シラバスを導入したことに對する教官層の意見は?
- 七、シラバスを導入したことに對する学生層の意見は?

シラバスの現時点での評価について、文系、理系に分けて検討し、相違点などを取りだそうと試みたが、実際にはほとんど変わらない意見が示されていた。それゆえ以下は、教務関係教官のほぼ一般的な言っている意見である。

○シラバス導入以前の教科の説明は、大部分の学部で、授業担当者が最初の時間に口答または「学生便覧」などを用いて説明していた。医学部のように選択科目が基本的でない学部もあり、シラバスが必要とされなかった学部もある。

○シラバス導入年度は、ほとんどの学部で平成六年もしくは七年であり、先にも指摘しておいたように、自己点検の作業の時期と並行している。

○シラバスを導入した経過・理由は、外的条件(大綱化に伴うカリキュラム改訂作業、社会的要請)によるところもあったが、それにとどまらず、学生に授業の内容を理解させる、全授業計画の中で教官間の理解を促進する、カリキュラム履修の柔軟性を



持たせる、といった点にもある。

○シラバス導入の成果は、導入後いまだ日が浅いので各学部とも未調査であった。一般的な反応としては、教官側の授業計画がやりやすくなった、学生に対する授業科目の概略を理解させやすくなった、授業進行状況に対し学生も意識しているので教官側に緊張感がある、講義内容の検討の機会ができた、学生の質問が増えた、など。

○教官層の意見としては、おおむね肯定的であった。たとえば、教育担当者間の連携が密になった、履修申請のアドバイスに役立つ、シラバスにより授業内容の重複が避けられる、今後学部間の相互乗り入れが進むともっと必要性が増す、授業科目の品

いた。

○学生層の意見に関しても、おおむね肯定的との判断がされている。例えば、受講に際して、講義内容が事前に分かるのでよい、講義の進行状況が把握しやすい、など。その一方で、シラバスが理解されていない、期待していたほどの反応がない、などの意見もあった。

- 一、学年・性別は
- 二、シラバスを知っていますか?
- 三、シラバスをどのように使いますか?
- 四、シラバスの使い勝手はどうですか?
- 五、変更してほしい点があれば教えてください

質の均一化がはかられる、といった意見。ただし、講義内容がシラバスにより縛られて硬直化する危険がある、授業の柔軟性に支障がある、時間的にかなり前に作成する以上実際の授業にマッチしないこともある、といった否定的な意見もかなり見られた。また、おそらくサイズや分量に関して述べられたと思われる、資源の無駄遣いという意見は、学生の多くの意見と重なって

ただし、学生の場合には各学部の回答数に差があるため、定量的な比較はできなかった。それゆえ、参考資料のサンプリングとして使用したが、例外的に、教育学部では三八一名の学生に、次いで総合科学部では二九五名の学生にアンケートを実施している。予想外の貴重な資料となったことを、広報委員一同、この場を借りて感謝したい。

結論から言えば、シラバスの有効性を評価した上でかなり活用している学生も認められるものの、大多数としては、「親の心子知らず」のたとえのごとく、それほどの関心を示してはいないように見受けられた。もっともその一因は大学側にある。シラバスの有効性を学生に説明する努力がほとんどなされていないからである。学生による評価の大部分は「まあまあ」という程度である。ただ、何を比較の対象としたかは明らかではない。

要望は多いが、比較的集中している。かなりの要望として、「軽くコンパクトにしてほしい」「B5判にしてほしい」「学年別にしてほしい」「見やすくしてほしい」などがあり、また「評価法を明確にしてほしい」という意見も少なくなかった。「他学部のシラバスを見たい」という希望も多くの学部から出されているが、これは注目すべきことであるように思われる。筆者が所属する学部にも、五学部のシラバスしか用意されていない。シラバスの主な利用者が学生である以上、こうした学生の意見を配慮する

必要があるように思われる。

おわりに

今回の調査は時間的余裕がないままに行わざるをえなかったため、かなり制限された展望しかできなかったが、それでもシラバスの課題のいくつかは見えてきたように思われる。最後に、それらのうち五点だけを指摘しておく。

- 一、近い将来、全学的規模で追跡調査をする必要がある。
- 二、学生に対して、シラバス活用のガイダンスをする必要がある。
- 三、「カリキュラムの全学的開放」を謳う以上、各学部間にかんがりの共通性があるシラバスを作る必要がある。
- 四、他学部のシラバスを閲覧可能にする必要がある。
- 五、シラバスを携帯可能にする必要がある。

越智 貢(おち・みつぐ)

(広報委員会委員長)

早川式彦(はやかわ・のりひこ)

(同副委員長)

